

第 25 回中医学会勉強会 漢方応用講座

講師 路京華 老師

レポート：岸 奈治郎（岐至 漢方クリニック）

開催日 2017 年 4 月 1 日

今回は前回提示された症例について、路京華先生の弁証、治法を詳しくお伺いしました。

【症例】

60 歳女性

主訴) 15 年間続く発汗 畏風 足底の冷感

現病歴)

32 歳の時出産したが、その時は出産後 10 日で仕事を始めた。その時に風寒にあたったせい
か、浮腫が出現したことがあった。

45 歳ごろから畏風(寒さを嫌がること)、寒がり、足底の浮腫が出現してきた。それに伴っ
て、いつも冷たい風が吹いているような感じがしたり、左側頭部の痛み、背中 of 両側に皮
膚の下を虫が這うような感じが出現するようになった。汗もたくさんかくようになったの
で近くの病院を受診したところ更年期障害と言われ、更年安とカルシウム製剤を処方され
たが効果はなかった。

53 歳で閉経。発汗はひどくなり昼夜を問わず出るようになった。夜の方が沢山汗をかき、
汗をかいて寒くなる。布団を 1 重だと寒くて眠れないので 2 重にしており、寒いと眠れな
いので帽子をかぶって寝ている。

55 歳の時に甲状腺（甲状腺腫？）の手術施行した。

60 歳で検診を受けたが、不整脈、高コレステロール血症、脂肪肝、耐糖能異常を指摘され
た。

既往歴)

咽頭炎になりやすい。流産 2 回している。

現症)

汗：昼間は服がぬれるほど汗をかくが、夜になるともっとひどくなり、布団が濡れてしま
うほど発汗する。汗をかいた後は寒くなってしまい布団を 3 枚掛けて靴下をはいて寝てい
る。冷えると前額部の頭痛が出現するので、風邪薬を飲む。

口が渴いて水を欲するがたくさん飲むわけではない。風にあたりたくない。寒さが嫌であ

る。

左の腰が空虚。初診の時はむくみ、尿量減少はなかった。

食欲良好。排便1日1条。

睡眠が浅く目が醒めやすい。目が覚めた時や心煩のときには動悸が出現する。

に見える。性格は短気である。

視診：声は大きく元気 目は疲れ気味だが興奮している

脈診：浮弦細微数だが、中取・沈取で無力

舌診：淡紅色 薄白苔 裂紋経度認める

=====
路先生解説

黄帝内経 素問 陰陽別論には「陰搏陽別，谓之有子。阴阳虚，肠澼死。阳加于阴，谓之汗。阴虚阳搏，谓之崩。」とあります。様々な解釈がありますが、文脈から脈診の話であると解釈されることが多いようです。しかし、素直に「陽に陰が加わるのが汗である」と解釈すると、陰陽の話になります。つまり汗が出るのは陽の熱があるからであって、蒸気が出るような感じで、温まるから汗をかくと考えています。それなのに、舌を見ると淡紅で裂紋があります。脈は浮弦です、浮いています、つまり病気の場所は表です。弦ということは 数というのはどういうことでしょうか？中、沈で無力ということはどうしてでしょうか？エネルギーが足りないということですね。気陰両虚 があって脈が弦ということは肝気が浮かんでいる。なぜこの弁証になるかということ、45歳の時に汗が出てひどくなったり、さらに53歳の時月経ののち汗がひどくなった。陰を損なったのは年齢による自然現象ともいえます。

朱丹溪は滋陰派ですが「陰常不足、陽常有余」と言っています。これを引用して、「医方考」の血証門二十一で四物湯のところに「气、血，人身之二仪也。天地之道，阳常有余，阴常不足。人与天地相似，故阴血难成而易亏。」とあります。常に陰は傷つきやすく作られにくいのです。女性の初経が14歳で来ますが、40歳くらいで終わります。つまり来るのは遅くて終わるのは遅い。陰が少なくなると 「年過四十、陰氣自半」というのは黄帝内経の言葉ですが、常に陰が不足して、陽が余っているという状態になります。「水不涵木」これは水をつかさどる腎の水、腎水が腎精ですね。これが減ってくれば木＝肝を養えなくなってくるわけです。そうすると木が枯れ、乾燥状態になってしまいます。本来肝の性質は柔です。よく肝は剛臓と言われますが、本来の性質は柔のはずで、病気になると剛臓ということなんです。肝臓は將軍と言われますね。敵がやってきたときに戦うわけです。つまり体にストレスがやってきたときには、いつも柔らかい肝が剛になって戦うわけなんです。木の肝の性質は曲直です。わん曲にもなれるし真っ直ぐにもなれる、柔軟なわけなんです。この性質は腎水に養われているからできるわけで、養われないで枯れてしまうと硬くなり

ます。つまり肝気が強くなってしまいます。これは外からストレスがなくても、腎水で養われなければ肝が硬くなってしまふということを示しています。体の陰陽バランスが崩れてしまっているのです、更年期の女性は腎水が少なくなっていますから肝臓が硬くて、ちょっとしたことで怒りやすいわけなんですね。

「肝一体陰而用陽」という言葉があります、肝臓自体は血を蔵していますし 肝の作用は陽に属します。この年齢になると、肝の体が弱くなる、用の陽が強くなるわけです。男性もそうです。肝腎同源ですね。肝の方が血、腎の方が精です。精血が減ってくると陽気が浮かびやすくなってしまいます。なので、年になると首の上が汗が出やすいですね。上半身とか、首とか頭から汗をかくことが多いですね。顔色も熱をもって赤く見えます。顔が赤面しますね。真っ赤に見えて、リンゴのようになってしまうのは、陽が多いわけではなくて、陰が減ってしまつて陽が表に浮かんで、陽が上に浮かんできてしまつたと熱症状がたくさん見られるからなんです。陽が余るということで相対的に多く見えているわけです。本来陰は陽の中に隠れているのが正常です。水の中に龍が隠れている。水が少なくなると龍が住めなくなつてしまふので空に飛んで行つてしまふ。

除灵胎の 亡陰亡陽論にあります、

「经云：夺血者无汗，夺汗者无血。血属阴，是汗多乃亡阴也。故止汗之法，必用凉心敛肺之药。何也？心主血，汗为心之液，故当清心火。汗必从皮毛出，肺主皮毛，故又当敛肺气，此正治也。惟汗出太甚，则阴气上竭，而肾中龙雷之火、随水而上。若以寒凉折之，其火愈炽。惟用大剂参附，佐以咸降之品，如童便、牡蛎之类，冷饮一〔木宛〕，直达下焦，引其真阳下降，则龙雷之火反乎其位，而汗随止。此与亡阴之汗，真大相悬绝。故亡阴亡阳，其治法截然，而转机在顷刻。当阳气之未动也，以阴药止汗，及阳气之既动也，以阳药止汗。而龙骨牡蛎、黄耆、五味收涩之药，则两方皆可随宜用之。医者能于亡阴亡阳之交，分其界限，则用药无误矣。其亡阴亡阳之辨法何如？亡阴之汗，身畏热，手足温，肌热汗亦热而味咸，口渴喜凉饮，气粗，脉洪实，此其验也。亡阳之汗，身反恶寒，手足冷，肌凉汗冷，而味淡微粘，口不渴而喜热饮，气微，脉浮数而空，此其验也。至于寻常之正汗、热汗、邪汗、自汗，又不在二者之列，此理知者绝少，即此汗之一端，而聚讼纷纷，毫无定见，误治甚多也。」

（黄帝内经に曰く、奪血者に汗なく、奪汗者に血無し。血は陰に属するので、汗が多いということは陰を損なうということになる。それゆえ止汗の治療には心臓を冷まして肺を収斂する薬を用いる。それは何故であるか？心は血を主る。汗は心の液である。ゆえに心火を清す。汗は必ず皮毛から出る。肺は皮毛を主る。ゆえに肺気を収斂する、これが正当な治療法である。ただ汗がひどい時には、陰気が上につき、腎中の龍雷の火は水に随つて登る。もし寒涼剤を用いてその火を折れば、その火はますます激しくなる。ただ人参一附子などの大剤を用いて、佐薬に童便や牡蛎などの鹹味で降ろす様なものを使い冷やして飲むのであれば、ただちに浮いてしまつた真陽を引き下ろして下焦に到達するのだ。すなわち龍雷の火を反つて温めることで元あつた腎の位置に呼び戻し汗を止めることができる、これが汗にしたがつた治療である。これと亡陰の汗 ～。それゆえに亡陰亡陽の治療方法は

はっきりしていて転機はたちまち存在している。陽気がいまだ動かないならば陰薬をもって汗を止め、陽気がすでに動いているならばようやくで汗を止める。知れは竜骨牡蠣、黄耆、五味子など収澁の薬でどちらの場合にも用いられます。医者は亡陰亡陽に際して、その境目を見分け、間違わず薬を用いなければならない。その亡陰亡陽の弁証法はどうか？亡陰の汗は体が熱くなり、手足は暖かく肌は熱く汗も熱くて口の中は鹹い、口は渴いて冷たいものを飲みたくなり呼吸は荒く、脈は洪実である。亡陽の汗は反って体は寒く、手足は冷えて、肌も冷たく汗も冷えており、口の中は味が淡く粘っこい。口は渴かず温かいものを飲みたがり、呼吸は浅く脈は浮いて速く空虚である。普通の汗については正汗、熱汗、邪汗、自汗とあるが、亡陰の汗、亡陽の汗は記されておらず、これを知る者はほとんどいない。これは汗についての知識の一端であり、訴えもまちまちになり、一定の見解はなく、誤治が非常に多い。）

黄帝内経には汗は心の液であるから、汗が出すぎるとするのは心を傷つけると考えます。傷寒論 弁太陽病脈証并治(中)にも「亡血家、不可發汗、發汗則寒慄而振」とあります。月経血がとても多いとか、血小板の病気でよく出血しやすい人は傷寒を患ったとしても発汗してはいけないということです。なぜならば血汗同源と考えています。血液6割は血漿成分で、血漿成分のうち90%は水分です。津汗同源という考えもありますから、血・津液・汗は同源と考えていますね。ですから、汗を消耗すれば津液も血も消耗されるということになりますね。血は陰に属します。汗が出るということは陰を消耗するということになりますね。この症例の場合舌に裂紋があります。これはつまり陰を消耗しているということですね。除靈胎の文章の中で、汗を止める方法としては涼心斂肺の薬を使いなさいと書いてありますね。汗は心の液であるから、汗が出るということは心に熱があるということなので、心を冷やすのがよいということです。汗は必ず皮毛から出ます。肺は皮毛をつかさどりますね。皮毛の腠理を調整しているのは肺気ですから、汗を止めようと思えば肺気を収斂して腠理を閉じるということが必要になってくるからです。黄連や蓮子心、五味子、竜骨牡蠣などを使いますし、陰を消耗するので麦門冬で補ってもよいですね。これは通常の汗の治療の方法ですが、普通ではなくてとって甚だしく汗が出るというときはどうしたらよいのでしょうか？陰気が上にあがって消耗して無くなるほどになってしまいます。そうすると腎の中の龍雷の火(腎陽)がそれに伴って上にあがってしまっている状態ですね。張景岳は命門学説の中で「腎者主水，受五臟六腑之精而藏之。腎的藏精之所，叫做命門。精藏于此，是为阴中之水；气化于此，是为阴中之火。」と言っています。

また《素問・生气通天论》「阴平阳秘，精神乃治，阴阳离决，精气乃绝。」

陰陽のバランス 陽は陰の中に隠れている。太極図の中でもそうです。水の中に龍とか雷が隠れている。雷は雨の降るときによく出ますよね。陰の中のエネルギーをもって雷が出ますね。雷によって森に火事が起こります。人間の体も、陰の中にエネルギーがあります。まるで陰の中に陽が隠れている、そんな風に見えるわけです。それをこの症例にあてはめて考えると、汗をたくさんかくことによって水(陰)がなくなってしまうですね。そうす

ると腎（陰）の中の龍雷の火は今まで隠れていたのですが、隠れる水がなくなってしまっ
て上にあがっていくということになります。そこで冷やす薬を使うと、日が強くなってし
まいます。なので、附子とか人參とか温める作用の薬を冷たくして飲むと、龍雷の火が元
の場所に戻って汗が止まるということなんです。

45 歳の時からよく汗が出るので、衛気が漏れて気陰両虚になります。これはよくあるパタ
ーンですね。補気剤、滋陰剤を使えばいいですね。この症例では汗が出すぎています。そ
れによって陽気が以上に漏れ出てしまって、腎陽（龍雷の火）が外に出て行ってしまいま
す。これは熱ですが邪熱ではありません、命門の火です。体の中のボイラーですね。その
火がなくなってしまうと冷えてしまいますから、体表は寒さに弱くなって布団を何枚もか
ぶって帽子をかぶって靴下をはくわけです。外気や風で寒くなってしまい風邪を感受して
しまいますね。そこで発表剤なんか飲んでしまうとだめですよ。よけいに裏のエネルギ
ーを消耗してしまいますね。葛根湯なんか使ってしまうと陽が虚してしまい腠理を閉じる
ことができなくなって汗が出て止まらなくなってしまいます。こういうときには麻黄附子
細辛湯で太陽（体表）少陰（腎）の両方に作用して、助陽解表するわけです。附子で陽気
を助けてあげないとだめですね。

寒くなって前額部が痛くなる時によく使うのは呉茱萸ですね。

呉茱萸湯の方歌にも「呉茱萸湯人參枣，重用生姜温胃好，阳明寒呕少阴利，厥阴头痛皆能
保」（呉茱萸湯は人參と大棗を用いるが、生姜をたくさん使って胃を温めてよくする。陽明
胃の嘔吐、少陰脾による下痢、厥陰の頭痛（頭頂部の頭痛）はこれで皆よくなる）とあり
ます。冷えてくる痛みの場合はよく呉茱萸湯を使います。傷寒論でも呉茱萸湯が出てきま
すが、

《伤寒论·辨阳明病脉证并治》243 条

“食谷欲呕，属阳明也，吴茱萸汤主之。得汤反剧者，属上焦也。”

《伤寒论·辨少阴病脉证并治》309 条

“少阴病，吐利，手足逆冷，烦躁欲死者，吴茱萸汤主之。”

《伤寒论·辨厥阴病脉证并治》378 条

“干呕吐涎沫头痛者，吴茱萸汤主之。”

冷えて嘔吐をするときには胃を温めて嘔気を良くします。少陰の下痢にも使います。癌の
手術後の下痢の人に呉茱萸湯を使って治したことがあります。厥陰の頭痛にも使えますね。
子の頭痛の時は必ず冷えを伴っているときに使います。

高齢の人、冷えている人、裏が虚しているときに解表剤を使うときには副作用が出やすい
ですね。気虚のときには参蘇飲などを使った方がいいですね。舌の色が薄くて冷えている
ときには裏を温める薬を使った方がいいです。

この症例に戻ると、陽気が表に出すぎているのですが決して余っているわけではありませ

んね。瀉してはいけません。真陽を降ろすのが唯一の治療方法ですから潜陽しなければいけません。

舌が淡なのは陽気を消耗してしまっているからです。

脈が浮なのは陽気が浮いてきてしまっているからです。

汗は心の液ですから動悸などの心の症状が出ています。

神も浮いてきてしまっていますから睡眠がよくないんですね。

次のような条文があります。《景岳全书·不寐》「寐本乎阴，神其主也，神安则寐，神不安则不寐。其所以不安者，一由邪气之扰，二由营气之不足耳」不眠の原因の一つは邪によるもの。もう一つは営気不足（神を養うものが足りない）であると書いてあります。この症例では陰が不足しているので営気も不足している。夜になると営気が陰に入れなくて眠れないという状態ですね。

【弁証】 衛陽不足 気陰両虚 心経鬱熱 肝気浮張

【治則】 益固表陽 清斂心神 平潜浮陽 洩収汗津

【処方】

生黄耆 9	桂枝 2	芍薬 10	防風 6
太子参 9	五味子 6	炒棗仁 15	蓮子心 4
黄連 3	地骨皮 9	天麻 10	夏枯草 10
川楝子 9	藿香 9	浮小麦 30	生竜骨牡蠣各 20

黄耆桂枝五物湯：黄耆、桂枝、芍薬、生姜、大棗

桂枝はたくさん入れると発汗してしまうから、少量にしている。

玉屏風：黄耆、白朮、防風

生脈散：人参、五味子、麦門冬

蓮子心+黄連で心の熱を冷ます。

五味子、竜骨牡蠣の収斂作用。

太子参は人参でもよいけれども

酸棗仁：養心養肝

夏枯草：ウツボグサの花穂

寒 苦辛 肝胆

効能：清肝泻火，明目，散结消肿 沈肝作用を期待して配合する。

川楝子：センダン科トウセンダンの果実

苦寒 肝、小腸、膀胱

効能 疎肝泄熱 行気止痛 驅虫

主治 用于肝郁化火，胸脇、腕腹胀痛，疝气疼痛，虫积腹痛。

浮小麦 30g 止肝作用。

葉天士「温熱論」の中で

「若斑出熱不解者，胃津亡也，主以甘寒重則如玉女煎，輕則如梨皮、蔗漿之類，或其人腎水素虧，雖未及下焦，先自徬徨矣，必驗之於舌，如甘寒之中，加入鹹寒，務在先安未受邪之地，恐其陷入易易耳。」

もしその人の腎陰が弱ければ、病気がまだ下焦に届いていないといっても、必ずその人の舌診で甘寒（知母、沙参、麦門冬など）の薬の中に鹹寒（鼈甲、地黄など）の薬を配合します。まだ邪を受けていない所を安定させる必要があって、そうしなければ邪が容易に耳に入ってしまう恐れがある、ということを行っています。

もし胃腸が弱い人を治療するときに、症状が出てから治療をするのでは遅くて、脾胃を守りながら治療をするということなんですね。この症例ではまだ肝に及んでいないけれども、肝に作用する薬を使っていくということです。